

一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報

むかい の  
向野遺跡 II



1991

大分県教育委員会

## 例 言

1. 本書は平成2年度に発掘調査を実施した、一般国道10号中津バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 調査の組織は次のとおりである。  
調査主体 大分県教育委員会  
調査委員 賀川 光夫(大分県文化財保護審議委員・別府大学教授)、小田富士雄(大分県保護審議委員・福岡大学教授)、後藤 宗俊(別府大学教授)、後藤 正二(大分県教育庁管理部参事兼文化課長)、林 英輝(同 課長補佐)  
調査主任 清水 宗昭(同 埋蔵文化財第1係長)  
調査員 坂本 嘉弘(同 主査)、宮内 克己(同 主査)、西 哲弘(同 主任)、小林 昭彦(同 主任)、原田 昭一(同 主事)、後藤 晃一(同 主事)、富田 修司(同 嘱託)、高松 永治(同 嘱託)、新宅 信久(同 嘱託)
4. 本書の執筆、編集には後藤晃一がたった。

## 目 次

I はじめに	1
1) 調査の経過	1
2) 平成2年度調査の概要	1
II 発掘調査の概要	5
1) 向野遺跡兵後畑地区II区	9
2) 向野遺跡現道部分	16
III まとめ	24

表紙の写真は向野遺跡兵後畑地区II区検出の1号祭祀土坑

# はじめに

## 1) 調査の経過

昭和55年度から実施している一般国道10号中津バイパス建設に伴う発掘調査は、現道拡幅に伴う宇佐地区の向野遺跡の前年度未買収地を残すのみであった。今年度その買収も成立をみ、5月の終りより残る最後の一部分について調査を実施した。調査対象地は、前年度調査を実施した兵後畑地区Ⅰ区の西側隣接地で、大半の遺構について兵後畑地区Ⅰ区と連続性が想定されたため、新たな地区名は設定せず兵後畑地区Ⅱ区とした。調査は7月のおわりに終了した。

なお、今年度中津バイパス建設に付随して現道一車線分の土の入れ換え工事が行われることになり、発掘調査を実施することとなった。調査対象地は、今年度までの調査結果から遺構が濃密に分布すると想定される市場地区Ⅲ区から兵後畑地区Ⅱ区との間の隣接地に限った。調査は、11月のはじめより着手し、12月のおわりをもって終了した。これをもって一般国道10号中津バイパス建設に伴う発掘調査は総てを終了したこととなる。

## 2) 平成2年度調査の概要

向野遺跡・現道部分の本調査を行った。向野遺跡は、五十石川低地と呼ばれる段丘上平野部に立地する遺跡で調査対象面積約13,000㎡に及ぶ。当遺跡は、大きく兵後畑地区・市場地区・ヲソヲ地区・檜植地区・川楽地区の五つに分かれる。今年度はこのうちの兵後畑地区について調査した。兵後畑地区については、前年度東半分（兵後畑地区Ⅰ区）を調査しており、今年度は残る西側半分（兵後畑地区Ⅱ区）を調査した。

兵後畑地区Ⅱ区では、溝8条、土坑9基、祭祀土坑3基、掘立柱建物3棟、土坑墓9基、ピット、弥生時代の遺物を含む落ち込み等を検出した。このうち溝4条は、兵後畑地区Ⅰ区で検出したものと連続するものであった。更に掘立柱建物についても兵後畑地区Ⅰ区のものとはほぼ軸線の一致するものが認められており、これらの遺構は一連のものとしてとらえられる。兵後畑地区Ⅰ区では全く検出されなかった遺構で注目されるものとして弥生時代の遺構がある。土坑墓、祭祀土坑、落ち込み等が検出されており、このうち土坑墓については、列状配置が認められ注目される。また祭祀土坑については、位置関係から近接する土坑墓群に伴うものと考えられる。弥生時代の遺構は総て弥生時代中期に位置付けられる。

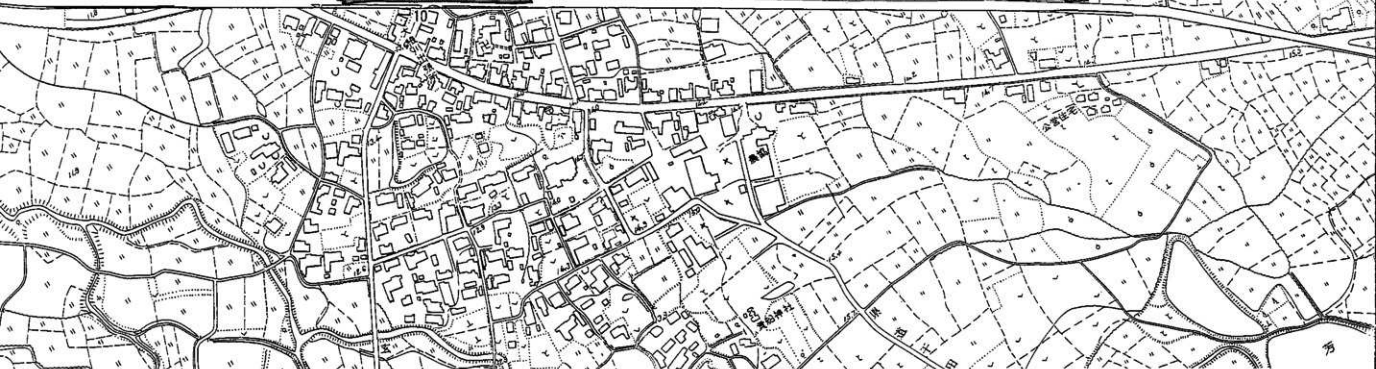
現道部分調査では、溝12条、掘立柱建物2棟、土坑11基、包含層等を検出した。このうち溝5条及び包含層に関しては、市場地区Ⅰ区・兵後畑地区Ⅰ区からの連続が確認された。特に溝1及び包含層からは8世紀～9世紀の遺物が豊富に出土しており、供養具とされる盤、環類が大半を占めていた。前年度でも触れた古代官道と溝との関連を考えるうえで重要な資料と言える。また、弥生時代後期の土坑が3基検出されたが、そのうち1基は甕を割って土坑を覆うように配置しており、土器蓋土坑墓の可能性が考えられる。しかし、土坑の規模が遺体を納めるにしている小さい点など問題点も多く、更に検討を要する。




  
 本図は国土院「土佐市」(字区)  
 (1:27,500)の縮尺図を引用した。

- 1. 上ノ原橋大森群
- 2. 鞆助野地遺跡
- 3. 六軒町遺跡
- 4. 大池南遺跡
- 5. 清水原西遺跡
- 6. 黒水遺跡
- 7. 大野遺跡
- 8. 種多田遺跡
- 9. 森山遺跡
- 10. 寺起遺跡
- 11. 草場遺跡
- 12. 夜崎池西遺跡
- 13. 駒ヶ迫遺跡
- 14. 瓦ヶ迫遺跡
- 15. 火屋川遺跡
- 16. 向野遺跡

第1図 平成2年度調査遺跡と周辺遺跡位置図



※ 斜線部分は昭和63年度、平成元年調査地区  
 下線部分は平成2年度調査地区

【向野遺跡】

- |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| 1. 兵後堀口区 | 3. 市場1区  | 5. 市場田区  | 7. サソノ地区 | 9. 川島地区  |
| 2. 兵後堀1区 | 4. 市場II区 | 6. 市場IV区 | 8. 榎板地区  | 10. 現道部分 |



第2図 向野遺跡（昭和63年度～平成2年度調査）と周辺地形図



※ 斜線部分は昭和63年度、平成元年度調査地区  
 一丁部分は平成2年度調査地区

〔向野遺跡〕

- |          |         |         |          |          |
|----------|---------|---------|----------|----------|
| 1. 兵後畑Ⅱ区 | 3. 市場Ⅰ区 | 5. 市場Ⅲ区 | 7. ツツジ地区 | 9. 川幸地区  |
| 2. 兵後畑Ⅰ区 | 4. 市場Ⅱ区 | 6. 市場Ⅳ区 | 8. 榎坂地区  | 10. 現道部分 |

第2図 向野遺跡（昭和63年度～平成2年度調査）と周辺地形図

## II 発掘調査の概要

向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分の調査を行った。向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区については、前年度兵後畑地区Ⅰ区で検出された遺構が連続していることが想定されたため、全面発掘を行った。また、現道部分については、前年度までの調査結果と今年度調査の兵後畑地区Ⅱ区の遺構検出状況を踏まえ、遺構が濃密に分布していると想定される部分に限って調査した。遺跡の所在する地域は、両地区とも五十石川低地と呼ばれる段丘上平野部に位置する。

### 向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区（第4図）

当地区は、平成元年度に調査を行った兵後畑地区Ⅰ区の西側810mの範囲を示す。兵後畑地区Ⅰ区と関連する遺構として、溝、掘立柱建物等がある。特に溝に関しては、4条が兵後畑地区Ⅰ区のものと同一であった。また土坑墓群については、兵後畑地区Ⅰ区では検出されておらず、更に西側隣接地の大根川D地区、或は南側の現道部分でもみられないことから、北側に展開していく可能性がある。以下当地区で検出された遺構を列挙する。

- 溝(8条)……………8世紀～9世紀4条(溝1・2・3・4)・時期不明4条
- 掘立柱建物(3棟)……………時期不明
- 土坑(9基)……………8世紀～9世紀1基(土坑5)・近世1基(土坑1)
- 祭祀土坑(3基)……………弥生中期
- 土坑墓(9基)……………弥生中期
- 落ち込み……………弥生中期
- 井戸(1基)……………近世



第3図 向野遺跡調査区位置図

## 向野遺跡現道部分（第4図）

調査を実施した地域は、向野遺跡の市場地区Ⅰ～Ⅲ区(昭和63年度調査)、兵後畑地区Ⅰ区(平成元年度調査)、兵後畑地区Ⅱ区(平成2年度調査)の南側に隣接する約1,200㎡の範囲である。現道一車線分のみが調査対象となったため、6m幅の極めて限定された範囲内での遺構検証となった。しかし、現道部分で検出した遺構が、前述の調査区(市場地区Ⅰ～Ⅲ区、兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区)で検出された遺構と大半が連続しているため、これまでの調査結果をもとに遺構の性格を判断していくことができた。

溝(14条)……………8世紀～9世紀3条(溝1・5・7)・中世1条(溝4)・近世6条  
(溝2・3・8・9・10・11)・時期不明4条

掘立柱建物(2棟)……………時期不明

土坑(15基)……………弥生後期3基(土坑3・4・10)・8世紀～9世紀5基(土坑1・2  
・5・7・9)・近世1基(土坑6)・時期不明7基

包含層……………8世紀～9世紀

## 各遺構の相関関係（第4図）

今年度向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分で検出した遺構は、昭和63年度・平成元年度調査で検出した遺構と連続、或は関連するものが多く、ここで簡単に整理しておく。

### 向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区

溝……………溝1－溝1(兵後畑地区Ⅰ区)、溝2－溝2(兵後畑地区Ⅰ区)、溝  
3(兵後畑地区Ⅰ区)、溝4－溝4(兵後畑地区Ⅰ区)

掘立柱建物……………建物1－建物2・3(兵後畑地区Ⅰ区)軸がほぼ一致

### 向野遺跡現道部分

溝……………溝1・7－溝4(兵後畑地区Ⅰ区)、溝2－溝6(市場地区Ⅰ区)、  
溝5－溝2(兵後畑地区Ⅰ区)、溝8－溝9(兵後畑地区Ⅰ区)

掘立柱建物……………建物1－建物2・3(兵後畑地区Ⅰ区)軸がほぼ一致

包含層……………兵後畑地区Ⅰ区・市場地区Ⅰ区と連続

なお上記の溝に関しては、いずれも同一の溝であるため、名称の煩雑さによる混乱をなくすため下記のとおり名称を改める。

1号溝……………溝1(兵後畑地区Ⅰ区)、溝1(兵後畑地区Ⅱ区)、

2号溝……………溝2(兵後畑地区Ⅰ区)、溝2(兵後畑地区Ⅱ区)、溝5(現道部分)

3号溝……………溝3(兵後畑地区Ⅰ区)、溝3(兵後畑地区Ⅱ区)

4号溝……………溝4(兵後畑地区Ⅰ区)、溝4(兵後畑地区Ⅱ区)、溝1・7(現道部分)

5号溝……………溝6(市場地区Ⅰ区)、溝2(現道部分)

6号溝……………溝9(兵後畑地区Ⅰ区)、溝8(現道部分)

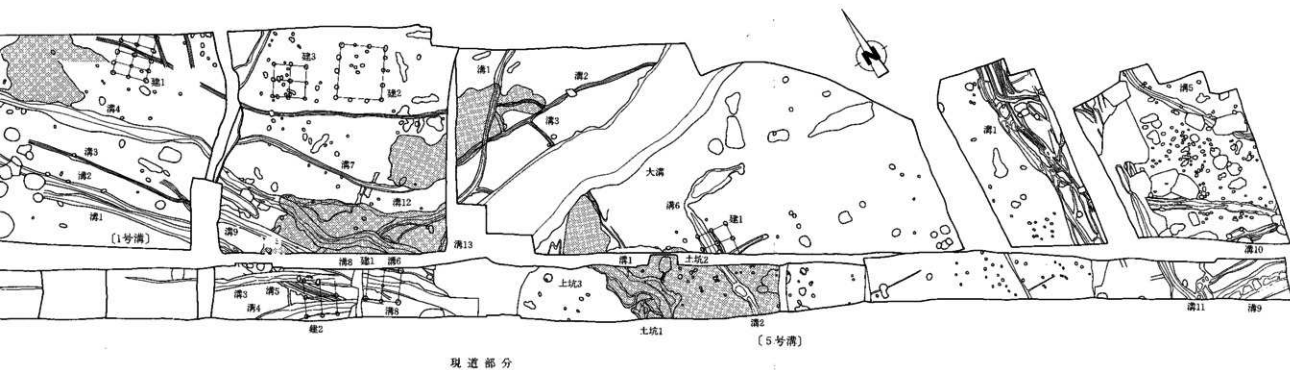


兵後畑地区I区

市場地区I区

市場地区II区

市場地区III区



森 (兵後畑地区II区)

原 (兵後畑地区I区・市場地区I区・現道部分)

第4図 向野遺跡 (兵後畑地区I・II区, 市場地区I~III区, 現道部分) 遺構配置圖

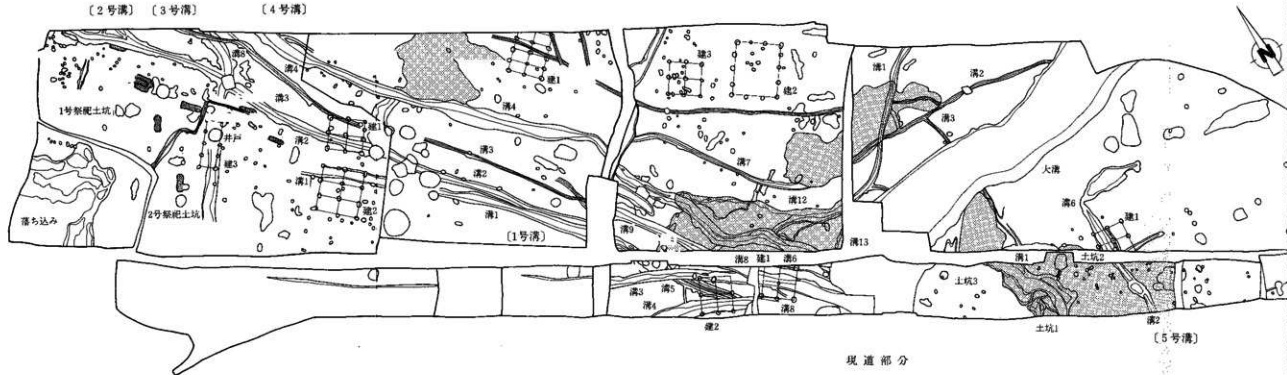


兵後畑地区II区

兵後畑地区I区

市場地区I区

〔2号溝〕 〔3号溝〕 〔4号溝〕



土塚墓 (兵後畑地区II区)

包含層 (兵後畑地区I区・市場地区I区・現道部分)

第4図 向野遺跡 (兵後畑地区I・II区, 市場地区I~III区, 現道部分) 遺構配置圖

## 1) 向野遺跡兵後畑地区II区 (第5図)

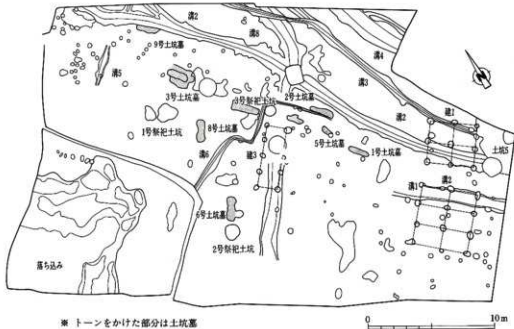
当地区は、南西に向かって緩やかに高くなる微高地縁辺に位置している。また、調査区南西隅の一角約150㎡は、水田形成に伴うと思われる掘削がなされている。検出した遺構は、溝8条、土坑9基、祭祀土坑3基、土坑墓9基、掘立柱建物3棟、井戸1基、落ち込み等であった。

溝 8条の溝のうち、時期を認定できたものは5条であった。

溝1は、確認長8m、幅1m、深さ0.2mであった。包含されていた遺物は、須恵器片、土師片等であるが、時期を明確にしうる遺物の出土は認められなかった。但し溝1は、東側の兵後畑地区I区で検出した溝1に連続するものであり、前年度調査の所見に基づき8世紀～9世紀に位置付ける。

溝2は、確認長35m、幅1m、深さ0.5mであった。当溝は調査区東側中央から北西隅に向かって延び、調査区中央付近で溝8と交差する。両者の切り合い関係は、土層の観察の結果、溝2の方が古いことが確認された。溝2は、兵後畑地区I区の溝2、更には現道部分の溝5につながる。兵後畑地区I・II区の溝2からの遺物出土状況は希薄であったが、現道部分の調査の結果溝5が8世紀～9世紀に位置付けられたため、溝2もその時期に位置付ける。

溝3は、確認長17m、幅0.25m、深さ0.5mであった。当溝は溝2とはほぼ平行して調査区東側から北西へ向けて延びる。出土遺物は僅少で、須恵器片、土師器片が数点出土したのみであった。当溝は、兵後畑地区I区の溝3に連続すると考えられるが、前年度調査でも遺物の出土は殆どみとえず、現段階では明確な時期は不明である。



第5図 兵後畑地区II区遺構分布図



全景（東方向より）



溝4（南方向より）



落ち込み（東方向より）

溝4は、確認長5m、幅2m、深さ0.6mであった。当溝もやはり調査区東側から北東方向へ向け溝3と平行して延びる。溝内からは8世紀～9世紀の須恵器、土師器が主体となって出土した。当溝は兵後畑地区I区で検出した溝4と連続しておりこの遺物の出土状況は、前年度の調査結果と符合する。

溝8は、調査区中央を南から北へ向かって延び、溝2を切った後溝3と平行して北西へ延びる。確認長は20m、幅1.5m、深さ0.1～0.2mであった。溝内からは、須恵器片、土師器片が若干出土しているのみで、明確な時期については現段階では不明である。

#### 掘立柱建物

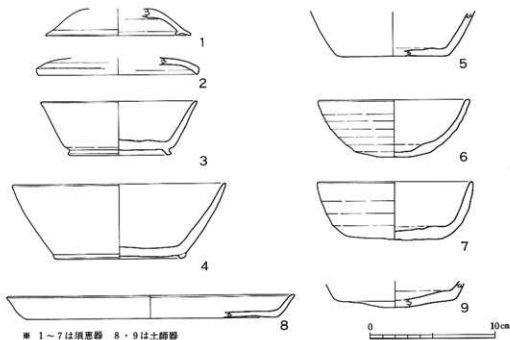
建物1は、2間(3.5m)×2間(3.5m)の純柱建物で、柱穴径0.5m、深さ0.4～0.8mであった。建物の方位については、兵後畑地区I区の建物2・3及び現道部分の建物1とはほぼ一致しており、同一のグループとしてとらえられる。柱穴からの出土遺物は僅少で、当建物の明確な構築時期は不明である。但し当建物は、8世紀～9世紀に位置付けられる溝2を切って建てられており、上記の建物の一群はこの溝2、或は同時期と考えられる溝4とは、時期を隔てて機能していたことが想定される。

建物2は、2間(4.5m)×3間(5.0m)の総柱建物で柱穴径0.5m、深さ0.3~0.5mであった。柱穴から遺物の出土はやはり見られず、明確な時期は現段階では不明である。当建物は建物1の南側に隣接して建つが、方位が若干異なる。むしろ方位的には次に述べる建物3とはほぼ一致する。建物1が兵後畑地区Ⅰ区及び現道部分で検出された建物と方位的に一致する事実等を考慮すれば、建物2・3は別の一群としてとらえる必要がある。

建物3については、1間(1.7m)×4間(4.0m)の部分か確認された。建物の東側はかなり攪乱されており、さらに東へ展開することも想定される。東へ展開して総柱建物または西側廂付きの建物になる可能性も考えられるが、現段階では1間×4間の建物としてとらえる。柱穴からは、やはり遺物の出土は認められなかった。

#### 出土遺物 (第6図)

- 1・2・5・6・8は溝4から出土、3・4・7・9は土坑5から出土した。
- 1・2 須恵器の蓋で、1は口縁部内側にかえりをもつ。
  - 3・4 須恵器の椀で、3は口縁部が僅かに外反し、高台は外に張り出す。4は体部が口縁部に向かい内湾気味に伸び、高台は体部と底部の境に直立気味に付く。
  - 5~7 須恵器の環で、5は口縁部を欠損し、6・7は体部が口縁部に向け内湾気味に伸びる。
  - 8 土師器の盤で、口縁部が僅かに外反する。
  - 9 口縁部及び体部の大半を欠くため器形の詳細は不明だが、土師器の環と考えられる。



第6図 兵後畑地区Ⅱ区出土遺物実測図

## 土坑墓

全部で9基の土坑墓を検出した。そのうちの7基（1～5・7・9号土坑墓）は、調査区中央を南東から北西へ向け、列状に配置されていた。また残る2基（6・8号土坑墓）は、他の7基の土坑墓とほぼ直交する形で検出された。こうした墳墓の配置については、地形による制約はまず考えられず、人為的なものであることは間違いない。

いずれの土坑墓からも、遺体の遺存は確認されず、更に副葬品等も検出されなかった。また、土坑の周囲に掘り込み（墓坑）を有す二段掘りの土坑墓は、3号土坑墓の1基のみで、他には検出されなかった。これに関しては、3号土坑墓に比べ他の土坑墓の深さが浅いことを考慮すると後世の削平による消失の可能性も考えられる。なお、各墳墓の頭位は明確なものが少なく、墳墓群の頭位の方向性については今後検討する必要がある。

### 2号土坑墓（第7・8図）

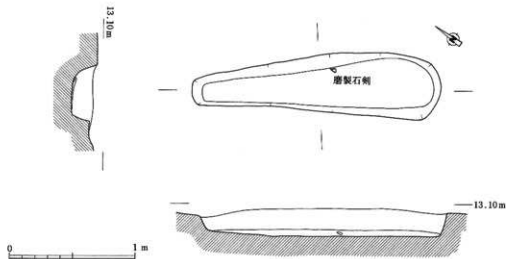
長さ2.0m、幅短径で0.22m、長径で0.5m、深さ0.22mの規模を有する。平面プランは、南東側端部が広がり半円形状をなす。こうしたプランから南東側が頭位であることが推測される。



2号土坑墓（南方向より）

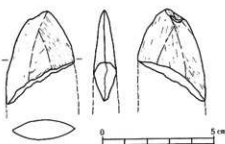


3号土坑墓（南方向より）



第7図 2号土坑墓実測図

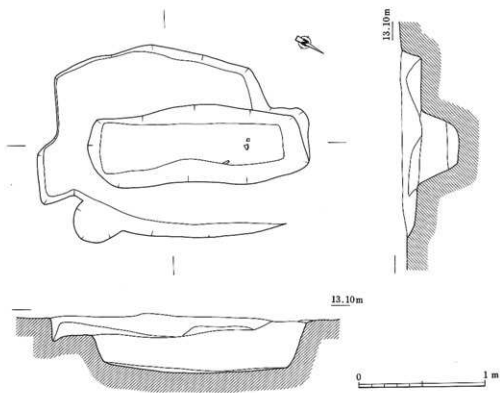
土坑墓内からは、磨製石剣の先端部が1点検出された。石剣の欠損状況から、堅い障害物に打撃が与えられた結果先端部が剥離し、更にその後加えられた圧力によって剣先が折れたものであることが確認された。また、この磨製石剣はちょうど先端部が土坑の内側を向いた状態で出土しており人体に刺突されたものであることが想定される。



第8図 磨製石剣尖測図

### 3号土坑墓（第9図）

遺体を取めた土坑の規模は、長さ1.7m、幅0.6m、深さ0.3-0.4m、周囲を浅く掘り込んだ墓坑の規模は長さ1.7m、幅1.5m、深さ0.15mであった。平面プランは土坑、墓坑のいずれも長方形に近い形状をなす。当土坑墓は、蓋の施設をもっていたことが推測されるが、その材質が何であるのか現段階では不明である。なお、墓坑を有するものはこの3号土坑墓だけであり、規模も他に比べると大きい。また、1号祭祀土坑とも位置的に近接しており、今後被葬者の位置付けについて検討して行く必要がある。



第9図 3号土坑墓実測図

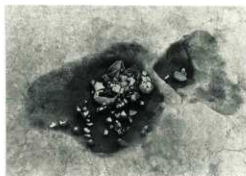
### 祭祀土坑

3基の祭祀土坑が検出された。各土坑の時期は、出土遺物よりいずれも弥生中期に位置付けられる。ここでは1号祭祀土坑について触れる。

#### 1号祭祀土坑（第10図）

2基の土坑が並列した状態で検出された。このうち西側の1基は、壁面がオーバーハングしており、更に出土遺物も希薄なことなどから東側の土坑とは、性格を異にすると考えられる。

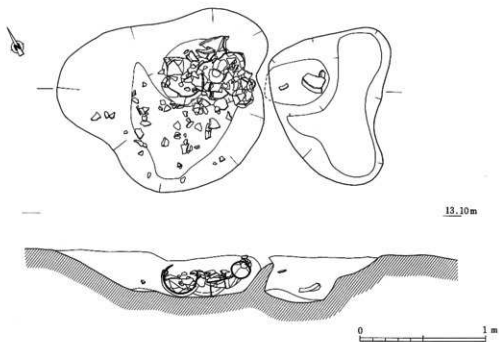
東側の土坑は、長径約1.6m、短径約1.3m、深さ約0.35mで歪んだ長槽円形のプランをなす。土坑内からは、多数の土器片とともに壺が3個体ほぼ完形に近い状態で出土した。壺はいずれも穿孔されていた。この1号祭祀土坑から出土した遺物は、その出土状況、或は近接する土坑墓群との位置関係などから、土坑墓群に伴う祭祀行為に関係したものと考えられる。



1号祭祀土坑遺物出土状況（北方向より）



1号祭祀土坑遺物出土状況（北方向より）



第10図 1号祭祀土坑実測図

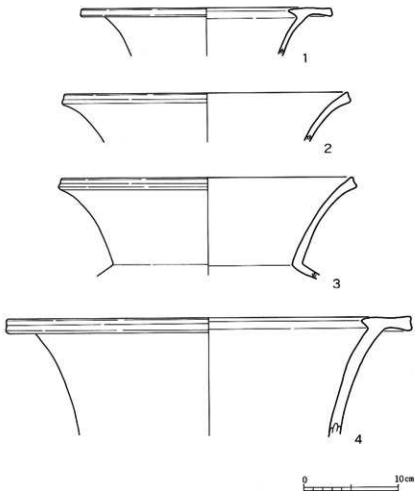


### 落ち込み

調査区西側隅で、約80㎡にわたって落ち込み状の遺構が検出された。遺構内からは、弥生中期の土器片がまとまって出土した。当遺構は、他の遺構と比べ地形的に低いところに位置しており、土坑墓群、祭祀土坑に伴う遺物が流れ込んだものと想定される。

#### 出土遺物 (第11図)

- 1 鋤先口縁を呈する壺の口縁部で、復元口径は、26.6cmである。
- 2 跳ね上げ口縁を呈する広口壺の口縁部で、復元口径は、30cmである。
- 3 跳ね上げ口縁を呈する広口壺で、胴部を欠損する。復元口径は、31cmである。
- 4 鋤先口縁を呈する壺で頸部下半を欠損する。復元口径は、43cmである。



第11図 落ち込み内出土遺物実測図

## 2) 向野遺跡現道部分 (第12図)

調査対象地は、昭和63年度から今年度までの間に調査を実施した向野遺跡市場地区Ⅰ～Ⅲ区及び兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区の南側隣接地域である。調査範囲は現在の国道10号の一車線分で、幅4～6m、距離にして162m、面積は約890㎡に及ぶ。地形景観は、市場地区Ⅰ～Ⅲ区及び兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区とはほぼ同様で、微高地をなしている。検出した遺構は、溝15条、土坑15基、掘立柱建物3棟、井戸1基、包含層、ピット群等であった。検出した遺構の中で、溝、掘立柱建物、包含層は、市場地区Ⅰ区及び兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区から連続するものが認められており、第4図を参照されたい。

溝 14条の溝のうち、時期を認定できたのは10条であった。

8世紀～9世紀—溝1・5・7

溝1は、確認長10m、幅2m、深さ0.6mの規模を有す。溝内からは8世紀～9世紀の須恵器、土師器を中心にかなりの量の遺物が出土した。溝1の規模、堆積状況、遺物の出土状況等は、溝7と似ており、更に兵後畑地区Ⅰ区で検出された溝4とも近似する。従ってこれらの溝は総て連続する可能性が高い。この一連の溝は更に南方へ向け延びていくと考えられ、前年度の概報でも触れた推定古代官道に一層接近することになる。また溝内から出土した遺物については供膳具とされる盤、環類の割合が高く、推定官道との関係を考えるうえで注目される。

溝5は、確認長14m、幅1m、深さ0.7mの規模を有し、兵後畑地区Ⅰ区で検出された溝2と連続する。前年度の調査では、遺物の出土状況が希薄で時期が確定できなかったが、今回の調査で8世紀～9世紀の須恵器、土師器が出土したため、その時期に位置付ける。溝5は溝1とはほぼ平行して更に南東方向へ延びると考えられ、溝1と併せて推定官道との関係を検討していく必要がある。

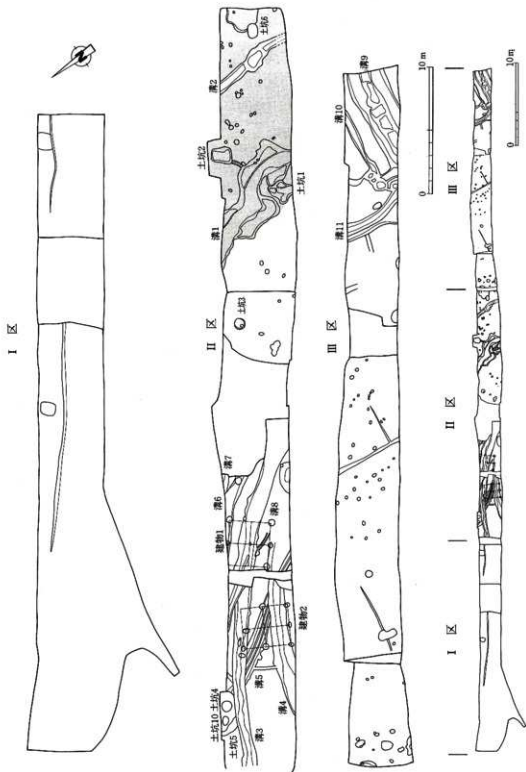
中世—溝4

溝4は、確認長16m、幅1.7m、深さ0.4mの規模を有す。溝内からは、中世の土器片がまとめて検出された。

近世—溝2・3・8・9・10・11

溝2は、確認長7m、幅0.8m、深さ0.2mの規模を有し、市場地区Ⅰ区の溝6に連続する。溝内からは近世の遺物がまとめて出土した。なお溝2は、調査区中央付近で長径2m、短径1.4m、深さ0.6mの土坑状の掘り込みがあり、流水を一度溜める機能を有していたことが想定される。

溝8は、確認長13m、幅1.4m、深さ0.2mの規模を有し、兵後畑地区Ⅰ区で検出された溝9と連続する。前年度調査で確認された丸太が溝8でも検出され、やはり土留めの機能を果たしたものと想定される。



第12图 现道部分遺構分布图

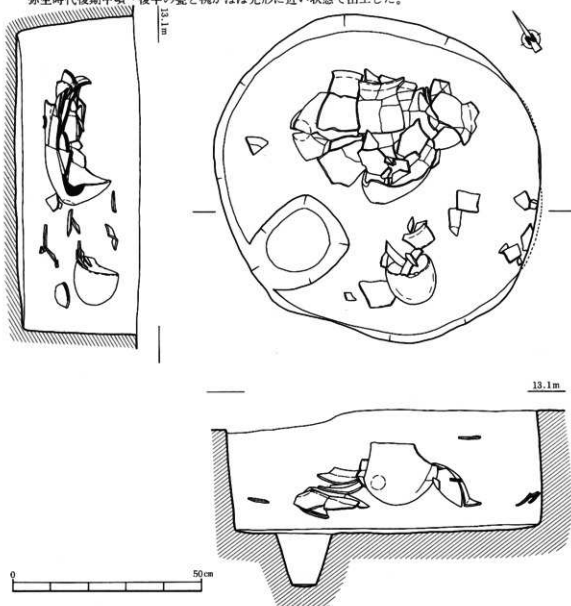
土坑 15基の土坑のうち、時期が認定できたのは9基であった。

弥生時代—土坑3・4・10

出土土器から、土坑3は弥生時代後期中頃～後半、土坑4は弥生時代後期に位置付けられる。また土坑10は、土坑4の西側に隣接して検出されたが、出土遺物は希薄で更に土坑の形態も土坑4とは若干異なるため、両者の関係については現段階では不明である。

### 土坑3 (第13図)

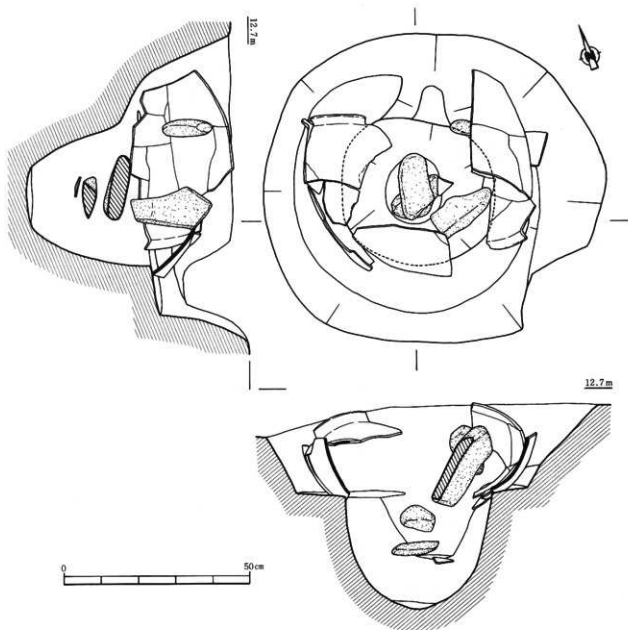
直径0.9mの円形プランで、深さは0.3mを有す。壁面は直立気味に立ち上がる。土坑内からは弥生時代後期中頃～後半の甕と椀がほぼ完形に近い状態で出土した。



第13図 土坑3実測図

#### 土坑4 (第14図)

直径0.9mのほぼ円形に近いプランで、深さは0.55mを有す。土坑内には更に直径0.4m、深さ0.3mの円形の掘り込みがあり二段掘りの状況を示している。造り出された段上には、土坑を覆うようにして甕が割られて配置されており、土器蓋土坑墓の可能性も考えられる。しかし、仮に土坑内の掘り込みを墓坑とすると、規模が小さすぎる懸念があり、土坑の性格については今後検討を要する。



第14図 土坑4実測図

#### 8世紀～9世紀—土坑1・2・5・7・9

土坑2は、長径1.7m、短径1mの隅丸長方形に近い平面プランで、一部南東隅で方形状に張り出す。深さは0.5mを有す。土坑内からは、8世紀～9世紀の須恵器片、土師器片が多量に出土した。特に方形状に張り出した部分からは床面直上で須恵器の蓋がほぼ完形の状態で検出されており、意図的に埋納した可能性もある。土坑の形態から墓であることも想定される。

#### 中世—土坑11

土坑11は、大半が調査区を越えてしまうため遺構の詳細は不明であるが、直径1m近くの円形プランをなす土坑であると考えられる。深さは0.5mを有し、土坑内からは中世の土器片が出土した。

**掘立柱建物** 建物1は、2間(3.5m)×2間(3.5m)の総柱建物で、柱跡は3本確認された。建物2は、2間(3.3m)×2間(3.3m)のやはり総柱建物で、柱跡は5本確認された。掘立柱建物の方位については、建物2が兵後畑地区I区の建物2・3とはほぼ一致しており、同時期としての位置付けが可能である。

**井戸** 遺構の大半が調査区外に出るため明確な規模は不明である。遺構内からは、主に中世の土器片が出土した。

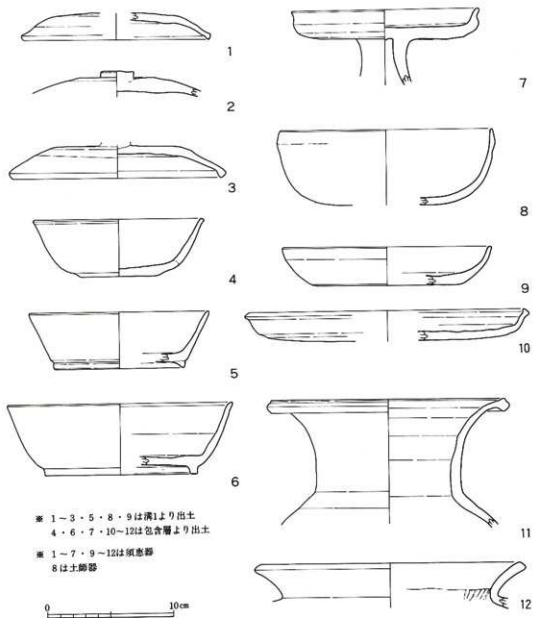
**包含層** 市場地区I区の包含層につながる。8世紀～9世紀の須恵器、土師器を包含していた。出土土器の中では、特に供膳具とされる盤、坏類が目立ち注目される。なお包含層の堆積状況は、兵後畑地区I区南東隅の溝4直上で検出された包含層と酷似する。出土土器の組成、時期等もほぼ一致しており、途中攪乱、地形等により消失しているものの、一連のものであることはまず間違いない。

#### 出土遺物 (第15図)

8世紀～9世紀の須恵器、土師器を包含層、溝1出土のものを中心に図示した。

- 1 須恵器の蓋で、口径15cmである。口縁端部に屈曲しくちばし状を呈す。
- 2 須恵器の蓋で、口縁部を欠くため口径は不明である。断面の色調は茶褐色を呈し、還元が及んでいないことを示している。
- 3 須恵器の蓋で、口径17cmである。口縁端部は屈曲しくちばし状を呈す。
- 4 須恵器の坏で、口径13.7cm、底径6.0cm、器高4.6cmである。体部は口縁部に向かい内湾気味に伸び、口縁端部は若干外反する。
- 5 須恵器の碗で、口径14.4cm、底径10.3cm、器高4.5cmである。体部は内湾気味に伸びる。
- 6 須恵器の碗で、口径18cm、底径12.2cm、器高5.6cmである。体部は口縁に向かい内湾気味に伸びる。高台は、体部と底部の境に直立気味につく。
- 7 須恵器の高坏で、坏部口径15cmである。口縁部は外反する。焼き歪みが顕著である。
- 8 土師器の碗で、口径15.7cm、底径9cm、器高6cmである。体部は内湾気味に立ち上がる。

- 9 須恵器の皿で、口径16.7cm、底径11.2cm、器高3cmである。体部は内湾気味に伸びる。
- 10 須恵器の盤で、口径21.9cm、底径20.5cm、器高2.4cmである。口縁端部が内側に屈曲する。
- 11 須恵器の壺で、胴部を欠く。口径は18.6cmである。口縁部が肥厚する。
- 12 須恵器の壺の口縁部で、口径20.6cmである。頸部内面にへら状工具による圧痕が認められる。



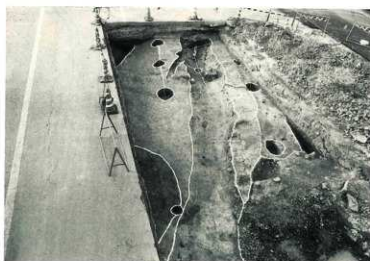
第15図 現道部分出土遺物実測図



II区 全景  
(西方向より)



II区 土坑4・10  
(南方向より)



II区 全景  
(東方向より)



Ⅱ区 溝1  
(南方向より)



Ⅱ区 土坑2  
(南方向より)



Ⅲ区 全景  
(西方向より)



### Ⅲ ま と め

平成2年度における中津バイパス建設に伴う発掘調査は、向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区、現道部分について実施した。

向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区では、溝8条、土坑9基、弥生土坑3基、土坑墓9基、掘立柱建物3棟、井戸1基、落ち込み等を検出した。また現道部分については、向野遺跡の市場Ⅰ～Ⅲ区、兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区の南側隣接地域一車線分について調査し、溝15条、土坑15基、掘立柱建物2棟、井戸1基、包含層、ビット群等を検出した。

#### 溝

兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分で検出した溝の中には、兵後畑地区Ⅰ区、市場地区Ⅰ区で検出した溝と同一と見なされるものがあり、各溝の名称の混乱を避けるため今回1～6号溝にまとめて扱う(第4図参照)。このうち2号溝については前年度の調査で古墳時代に位置付けていたが、今回の調査で溝内から8世紀～9世紀の遺物が出土したため溝の時期を8世紀～9世紀に変更する。また4号溝については、兵後畑地区Ⅱ区、現道部分の両地区で溝内から8世紀～9世紀の須恵器、土師器が豊富に出土した。出土した須恵器、土師器の中には供膳具とされる盤、坏類が極めて多い点が注目される。こうした遺物の出土状況は、前年度調査の兵後畑地区Ⅰ区の部分についても同様であった。ところで2号溝と4号溝は7～8mの間隔で平行して延びていることが確認された。更に両溝は、現代の里道のほぼ真下を沿うようにして走っており小字の境界ともほぼ一致している。両溝が同時に機能していたかどうかは、今後更に出土遺物から検討していかねばならないが、仮にそうだとしたらこの両溝が道を挟む側溝だった可能性も想定される。前年度の概報でも触れたように現道部分の南側には古代官道が<sup>推定</sup>されている。今回の調査でこの2・4号溝が更に南へ延びて行くことが確認され、両溝が推定官道の至近距離まで達することはほぼ間違いない。2・4号溝が道を挟む側溝だとしたら、古代官道との関係は一層密接なものとして把握えられる。なお今回の調査により兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分の南西側は地形的に低くなっていることが確認された。こうした地形的な制約等も考慮に加え、今後官道と2・4号溝との関係を検討して行く必要がある。

#### 掘立柱建物

兵後畑地区Ⅱ区、現道部分両地区で検出した建物はいずれも出土遺物が僅少で明確な時期は不明である。各建物はその方位により、Ⅰ群(兵後畑地区の建物1、兵後畑地区Ⅰ区の建物2・3、現道部分の建物1)、Ⅱ群(兵後畑地区Ⅱ区の建物2・3)の2群に分けられる。建物と溝の切り合い関係については、Ⅰ群では兵後畑地区Ⅱ区の建物1が、2号溝を切って建てられ、現道部分の建物1が溝6・8に切られていた。Ⅱ群では兵後畑地区Ⅱ区の建物2が、1号溝に切られていた。またⅠ・Ⅱ群以外では現道部分の建物2が2号溝を切って建てられ、更に中世

の溝4(現道部分)に切られていることが確認された。したがってI群の建物群及び現道部分の建物2は、2号溝或は4号溝(前述のように仮に2号溝と同時に機能していた場合)と時期を隔てて存在し、II群の建物群は1号溝と時期を異にすることが考えられる。特に2・4号溝との関連については、II群の建物群、或はI・II群に属さない兵後畑地区I区の建物1、市場地区I区の建物1との間に可能性を求めていく必要がある。

### 土坑墓

土坑墓は総て兵後畑地区II区から検出された。9基の土坑墓のうち、7基は調査区中央を南東から北西へ向け、列状に配置されていた。また残る2基は、他の7基とはほぼ直行する状態で検出された。土坑墓は東側の兵後畑地区I区或は南側の現道部分では全く検出されず、したがって北西方向に更に展開して行く可能性が高い。蓋の痕跡を残す土坑墓は、3号土坑墓の1基のみで、それも土器蓋なのか石蓋なのかは不明である。他の土坑墓については、深さが3号土坑墓に比べて浅いこともあり、後世の削平による消失が考えられる。各土坑墓から人骨、副葬品は検出されなかった。遺物の出土が認められたのは2・3号土坑墓のみで、3号土坑墓出土の遺物も流れ込みである可能性が高い。2号土坑墓からは磨製石剣の切先が1点、土坑墓の床面で内側を向いた状態で出土した。磨製石剣は先端部がつぶれていた。こうした磨製石剣の切先が土坑墓から出土した例は北部九州でいくつかあるが、大半が人体へ刺突された際のショックにより折損し体内に残ったものとして扱われている。2号土坑墓における磨製石剣の切先の折損状況或は出土状況は、それらの例と相似しており同様の位置付けが可能である。

### 土坑(弥生時代)

兵後畑地区II区及び現道部分から弥生時代の土坑を6基検出した。出土遺物から、兵後畑地区II区の3基は弥生中期に、現道部分の3基は弥生後期に位置付けられる。このうち兵後畑地区II区の3基は土坑の性格上、いずれも土坑墓群に伴う祭祀行為に関係する可能性が強いことから、「祭祀土坑」として区別した。1号祭祀土坑からは、多数の弥生土器片に混じって壺が3点、ほぼ完形に近い状態で出土した。壺はいずれも穿孔されており、近接する土坑墓群に関係する祭祀用土器であると考えられる。

現道部分の土坑3は、直径0.9mの円形プランで直立気味の壁面を有す。土坑内からは甕と碗がほぼ完形に近い状態で出土した。貯蔵穴の可能性が高い。

土坑4は、直径0.9mの円形プランを呈し、二段堀りの段上に土坑を覆うようにして割られた甕が配置されていた。その形状から土器蓋土坑墓が想定されるが、規模が小さすぎる点など問題があり、今後検討を要す。

註1 「墓坑」の呼称については、宇佐市教育委員会「筑前川流域遺跡群発掘調査報告書I」(「宇佐市文化財調査報告書」第2巻1986)に拠った。

註2 日野尚志「豊前国田河・企救・下毛・宇佐西郡における糸里について」(「佐賀大学教育学部研究論集」第25集(I)1977)

註3 橋口達也「4. 犠牲者」(「弥生文化の研究」第9巻弥生人の世界1986)

福岡県教育委員会「福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査」(「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XIII 1997)

鳥栖市教育委員会「安永田遺跡―楠比遺跡群総観確認調査第3年次調査報告書一」(「鳥栖市文化財調査報告書第16集」1983)他

一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報

向野遺跡Ⅱ

1991・3・31

発行 大分県教育委員会

印刷 東洋印刷有限公司